

第8章 発達障がいについて

発達障がい(注)という言葉が最近よく聞くようになりました。新聞やテレビなどでも、たまに報道されています。その内容について学びたいと思います。

発達障がいとは、脳神経系の発達に起因し、認知や言語、運動などの発達にばらつきがあったり、感覚の違いがあるために(障がい特性)、生活の中で本人に困り事が生じやすくなり、理解や支援を受ける必要がある状態のことです。

ぱっと見た感じで努力が足りないと思われがちですが、実は本人の努力不足というわけではなく、もともと持っている脳のタイプなのです。

主な発達障がいについて説明します。

① 広汎性発達障がい

自閉症やアスペルガー症候群、特定不能の広汎性発達障がいなどがあります。

自閉症というのは、3歳までに発症し、言葉の遅れ、対人関係がうまくもてない、こだわりがある、といった特徴を持つものです。聴覚が非常に敏感で、大きな音が苦手であったり、目で見た記憶が得意といった様々な特徴があります。知的には遅れがある状態から遅れのない状態まであります。知的な遅れがないといっても能力のばらつきがきわめて大きいことがしばしばあります。

アスペルガー症候群とは、知的な遅れや言葉の遅れがないタイプの自閉症で、特別な能力に秀でている場合もあります。

特定不能の広汎性発達障がいとは、自閉症やアスペルガー症候群ほどではないが、自閉的な特徴を有する人たちです。

広汎性発達障がいの人たちは、場の雰囲気や人の気持ちが読めなかったりして、誤解を受け、他人との関係がうまくもてないことになりがちです。

また、いじめの対象になって、周りはみんな敵だという思いが強くなって、ささいなことでも腹を立てるような場合もあります。自分の気に入ったことには熱心に取り組むので、それを仕事に生かす人もいます。

また、場の空気を読むとか対人関係をうまくもつといったことは具体的

に教えていくことで理解が進むことが多いです。

② 注意欠陥多動性障がい (ADHD)

不注意、多動性、衝動性の症状を特徴とします。幼い頃から、がさがさと動き回るとか集団の中で他の子どもたちに合わせて行動できないとか、衝動的に手が出て乱暴をしたり忘れ物が多いといった行動が見られます。幼い頃落ち着きのない子も思春期になると、落ち着いてきて、多動性は目立たなくなります。しかし、不注意は残り、物忘れやうっかりミス、整理整頓が苦手など日常生活面に影響する場合があります。大人になってからADD（注意欠陥障がい）と診断されることもあります。覚えておくべきことはメモに書いて忘れないようにするなど、工夫をしていくことが大切です。

③ 学習障がい (LD)

全般的に知的障がいはないものの、聞く、読む、話す、書く、計算する、推論する、といった能力のうち特定の能力に遅れを示すものです。たとえば、書くのが苦手な人は、年齢相応に論理的な話ができるのに、いざ文章を書くとなったら小学生の漢字もあやふやだったりするという具合です。そういう人は必ず電子辞書を持ち歩くなど、その人の苦手な部分をサポートするようにしていくことが良いのです。

以上が主な発達障がいです。

広汎性発達障がいとADHDが合併したり、学習障がいとADHDが合併したりすることもあります。また、診断名も成長とともに変わってくる場合もあります。幼児期には多動性が目立ち、ADHDと呼ばれていたのが、成長し、落ち着きが出てくるとアスペルガー症候群と診断されたりする場合もあります。

発達障がいは、すぐに分かるとはかぎりません。小さいときに見過ごされ、そのまま思春期になり、人づきあいがうまくできず、本人が悩んでいることがしばしばあります。言いたいことを一方的に話してしまったり、人間関係の中での暗黙の了解（真実であっても相手が不快になることは言わないなど）が分からなかったり、冗談を本気に受け取ってしまったりな

どで対人トラブルとなり、被害者意識が強くなったり、人間関係がうまくいかない自分を責めたりします。また、特に軽度～境界域知能の子どもでは、小学校で努力して適応し、気づかれにくく見のがされ、本人にとっては過大な要求水準を期待される反面、思うようにいかず失敗体験を繰り返し、自尊感情が低下し、二次的に不適応を起こしている子どももいます。

一方、自分の好きなことには熱心に取り組んで、能力を発揮したり、仕事に生かしている人もいます。得意、不得意の差が大きいので、本人の特性をよく見きわめ、仕事を探すことが大切です。

自己認識を高めるためには、専門医からきちんと診断を受け、自分のことを知った方がいい場合もあります。また、あえて、診断を受けるほどではない場合もあり、個々のケースに応じて判断していきます。

第5章で、本人の課題は本人に任せましょうと書きましたが、発達障がいがあると、(発達障がいの程度や特性にもよりますが) 任せておいても、責任を学ぶわけでもなく、問題もそのままであったり、状況が悪化するといったこともあり得ます。ですから、本人と話し合いつつ、信頼できる機関などとも協力しながら、事態を進めていくことも必要でしょう。つまり、本人の課題に口出しするわけですが、その場合でも、あくまで子どもの課題解決に協力していくという姿勢が大切です。

(注)：「害」という漢字が与える印象から、発達障がい者の気持ちを傷つけることもあり得るので、平仮名にしました。

参考文献：「アスペルガー症候群・高機能自閉症のすべてがわかる本」

佐々木正美 講談社

「AD/HD（注意欠陥/多動性障害）のすべてがわかる本」

市川宏伸 講談社

「思春期のアスペルガー症候群」 佐々木正美 講談社

「大学生の発達障害」 佐々木正美・梅永雄二 講談社

「高校生の発達障害」 佐々木正美・梅永雄二 講談社